

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1715号 2004年01月05日(月)

## 《 let's feel good ! 》

明けましておめでとうございます。今年はいンドのデリーからの発信です。

何と言っても冬の北いンド地方の特徴は霧です。霧は夕方から出始めて、朝など視界20メートルと言った酷い状態になる。だから飛行機がしばしば飛べない。リスケジュールされること頻繁です。朝の10時くらいまで霧がかかっている日もある。日中でもしばしば完全には消えない。北いンドに来てまだ日中に太陽を見たのは、昨日のジャイプールだけです。

霧が出るくらいだから、寒い。これはこの国を見誤っていました。「いンドなど、冬でもそれなりに温かいだろう」と思っていました、大間違い。男はほぼ例外なく皮のコートを着るか、深々とショールを巻いて、デストロイヤー並にマスクで顔を覆っている。日中は暖かなくても、夜はすごく寒い。もってくるものを間違えた、と思う毎日です。

いンドに来ているのは、中国を接近追尾して高度成長にスパイラルに入ろうとし、近代化を進める人口10億の国で何が起きているかを見たい、と思ったからです。短い旅ですが、遠くで見ているよりも来て観た方が良だろう、と。

そこは摩訶不思議な世界です。アグラ(タージマハールのある街)からジャイプール(ピンクシティと呼ばれる)に向かう幹線道路はそれは酷い道路で、乗っていても体がもっていかれるほど時には揺れるし、その周辺にはどうみても一日の生活費はどのくらいだろう、とクビを傾げる貧しい人々が住んでいる。そして主要交差点などに出来た汚い街には人々がたむろしているのですが、その道路の沿線では延々と光ファイバーの敷設が進んでいました。いンド人の友人が、「工事している人も、何をしているのか知らないのでは...」と。

今年のいンドの合い言葉は、「feel-good になろう」です。元旦の新聞からは、このことばが頻繁に登場している。これはいンドの財務大臣が「今年のいンドの目指すところ、目標とするところ」として掲げている、よってバジパイ政権のスローガンになっている言葉です。「今年一年を良い年にしよう...」という。

具体的に「feel-good」とは何か。例えば、3日のThe Times of Indiaには、「feel-good factor」として年初の2日のいンド株式市場で代表的指数であるSensexが史上初めて6000の大台を超えて終わったこと、そしていンドで人気のサッチンというクリケット選手が9000打点を叩き出し、史上4番目の偉大な選手になったことを挙げている。これが

一面のど真ん中に対等の「feel-good factor」(きもちんよか要因)として挙げられているのだ。

その下には、南アジア地域協力連合(SAARC)を二日後に控えて起きた列車襲撃のテロ事件を報じた記事があるのだが、その副見出しは「Elsewhere, The Feel-Good Factor Gets Derailed」とある。つまり、株が上がったり人気のクリケット選手が活躍したというインドにとっての「feel-good factor」(心地よき要因)はあったが、「そうした気持ちを台無しにしてくれることもほかでは起きた」と伝えているのである。つまり新聞の一面が「feel-good」なのか、そうでないのかで出来ているのだ。

少なくともインド政府は、自らが標語としている「feel-good」な雰囲気を保ち、そして広め、それを政策的に目標にしているように見える。例えば同じ日の新聞には、インド政府計画委員会(Planning Commission, Government of India)の全面広告が載っていて、その見出しは「India on The Move」とある。つまり、「行動するインド、変化するインド」ということだ。

バジパイ首相とパント委員長のメッセージが載っていて、それが面白いので翻訳して掲載します。

バジパイ首相 = 懐疑的になる必要などないのだ。昨年の5.5%から第10期計画(the Tenth Plan)の8%にインドが成長率を引き上げられるかどうかを思い悩む必要などない。

パント委員長 = 第10期計画のGDP伸び率は年率8%に引き上げるべきだと提案するに当たって、我々はインド国民のニーズと熱意を満たすことの緊急性を十二分に認識していた。我々はこれが達成可能だと考える

となる。そしてその下に昨年7-9月期のGDP伸び率を引用して「2004 begins with a bang-GDP rises at 8.4%」という一文が出てきていて、さらにその下に同期成長率が8.4%に達したことを報ずる各紙の記事の写真が掲載されている。

### 《 world on the move 》

そのインド政府の宣伝文句を借りるなら、今年の世界経済は「world on the move」といったところかもしれない。例年のごとく海外市場は既に始まっていますが、2日という一日の、今年最初の取引を見ても、世界の市場が今年はかなり動く予感がする。ニューヨークこそ高値を付けた後利食いの動きで昨年末比下げましたが、その他の世界の株式市場は大きく続伸して終わっている。

その予兆は、2003年の株式市場のダイナミズムに現れている、とも言える。特にアジアの株式市場の動きはめざましかった。上げた順から掲げると、一位はタイの116.

6%上昇。つまり、二倍以上になった。次ぐのがインドで、上昇幅は72.9%。それ以下は、パキスタン(65.5)、インドネシア(62.8)、中国(シンセン 45.5)、フィリピン(41.6)、香港(34.9)、台湾(32.3)、シンガポール(31.6)、スリランカ(30.3)、韓国(29.2)となっていて、その次が日本で24.4%の上昇。日本の下はマレーシア(22.8)、ニュージーランド(17.1)、オーストラリア(9.7)。

インドでも「株には個人投資家は注意すべきだ」という警告が聞こえる。冬の北インドの特徴のように、世界経済は霧に覆われ、視界が悪い部分は常に残るでしょう。アジアの株もこのままでは上げ続けそうもない。大きな反落もあるでしょう。ではその後はどうなるのか。また昨年だけで5.4%上がったインドのルピーのような通貨はどうなるのか。ドル・円の下はどこで、その後のドルは反発するのか。

今年も複眼的な思考をもって世界を見ていきたいと思います。

読者の皆様にとって、今年一年が良い年でありますように祈念します。

*《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》*